

いぶき 29号平成 25年 6月

世界の偉人たち「驚きの日本発見記」

第28回：ラインホルト・ヴェルナー（1825～1909年）

「子供の就学年齢は遅く7歳あるいは8歳だが、彼らはそれだけますます迅速に学習する。民衆の学校教育は、中国よりも普及している。中国では民衆の中でほとんどの場合、男子だけが就学しているのと違い、日本ではたしかに学校といっても中国同様私立校しかないものの、女子も学んでいる。召使い女がたがいに親しい友達に手紙を書くために、余暇を利用し、ボロをまとった肉体労働者でも、読み書きができることでわれわれを驚かす。民衆教育についてわれわれが観察したところによれば、読み書きが全然できない文盲は、全体の1%にすぎない。世界の他のどこの国が、自国についてこのようなことを主張できようか？」（出典：『エルベ号艦長幕末記』金森 誠也、安藤 勉訳（新



人物往来社）

ヴェルナーは、1845年にプロイセン王国（現在のドイツ北部からポーランド西部）の海軍に入り、ハンブルグで建造され日本遠征隊の輸送船であるエルベ号の艦長として活躍した人物です。万延元年（1860年）に幕府との通商条約を締結しようとする「オイレンブルク伯爵使節団」の一員として来日し、足かけ三年滞日しています。彼は航海記『エルベ号艦長幕末記』に、日本とプロイセン外交交渉のいきさつだけでなく、当時の日本の政治、経済、宗教、文化、民俗、人間、日本語をきめ細かく記録しています。

当時日本を訪れた外国人の多くが、日本人の認字率の高さに驚嘆していますが、日本人の「認字率」は江戸時代から数百年に渡って世界一だったようです。日本人は昔から「学び」に対して大変熱心で、義務ではない「寺子屋」に多くの子供たちが通い、武士では100%の認字率、町人や庶民層でもほぼ50%に達していたと言われ、同時代のロンドンが10%以下であったのに比べると驚異な認字率を誇っています。裏長屋に住む子供でも「手習い」へ行かない子供は男女ともほとんどいなかったし、日本橋や、赤坂、本郷などでは、男子よりも女子の修学数の方が多かったという記録も残っています。また、彼らは単に文字を「読み、書く」だけでなく、漢字をまるで絵のようにして「書」を描き、視ています。このような修学の精神が日本人の神髄として今尚生きているのです。

（参考：<http://www1.kcn.ne.jp/~kawamura/>

p1001.html、<http://nezu621.blog7.fc2.com>） 〈M. I〉